

## 大乘上座部について

佐々木教悟

### 一

大乘上座部という名稱は玄奘が西域記に用いているもので、その卷八摩揭陀國の條(大正五一、九一八中)、卷十羯陵伽國の條(大正五一、九二九上)、卷十一僧伽羅國の條(大正五一、九三四上)、卷十一跋祿羯咭婆國の條(大正五一、九三五下)、卷十一蘇刺佗國の條(大正五一、九三六下)にそれぞれあげられている。かの西域記のチベット譯では、これを Gnas brtan sde pa theg chen spyod pa (102b 1<sup>2</sup>)、Gnas brtan sde pa theg chen pa(124a 1<sup>3</sup>)、Theg chen pa sde pa gnas brtan pa (140b 1<sup>4</sup>)、Theg Chen spyod pa gnas brtan sde pa (144b 1<sup>4</sup>)、Theg chen spyod cin sde pa gnas brtan pa (147a.1<sup>5</sup>) 又譯して sde° prof. E. Lamotte はその原語として Mahā-yānashāvira を用いて sde°(Histoire du Bouddhisme Indien, p. 597)。この大乘上座部は西域記の記述からみても、たんに上座部とよばれるものとは明かに區別されていることが知ら

れるのであり、學者の中にはすでにそのことに注意している人もある(靜谷正雄「南天竺に於ける龍樹の遺蹟」龍谷大學論集三四一號、昭和二六年、水野弘元「佛教の分派とその系統」講座佛教、昭和三四年)。

### 二

玄奘がその地において大乘上座部の佛教が習學されていた、あるいは遵行されていたと報告しているのは上掲の五ヶ處であるが、その中、もともと注目すべきものは、佛陀成道の地である Buddhagaya におけるものと、セイロンの佛教古都 Anurādhapura におけるものとである。四世紀のグプタ朝 Samudragupta の治世(326—375)に、セイロンの Mahāman 又 Urasena の兩比丘がインドの佛跡巡行を行なつたが、かれらは歸國后、ときの國王 Śrimeghavarna (362—389)に對して、巡拜の際、宿泊所がなくてすこぶる困難した旨を報告した。そこで王はサムドラグプタに對して、セイ

ロンの僧院をインドの地に建立することの許可を求めた。インド側はセイロン側の要請に應じて、四大聖地の中の一ヶ處にのみ僧院を建立することを許可した。そこでセイロン側はブダガヤーの菩提樹附近にセイロン僧掛錫のための僧院を建立した。これが Mahabodhisamgharama (摩訶菩提僧伽藍)

あるいは Mahabodhivihāra (大菩提寺・大覺寺) とよばれるものである。七世紀にこの地を訪づれた玄奘は、この伽藍に止住する僧徒は減く千人あり、大乘上座部の法を習學すと述べている。思うに伽藍建立の因縁からかんがえても、そこに止住したものは、主としてセイロンの僧侶や佛教徒であり、そこで行なわれていた佛教は、その當時セイロンにも行なわれていた佛教であつたに相違ない。そしてその佛教が大乘上座部の佛教であり、律儀は清肅にして戒行は貞明なりと述べているから、おそらく上座部の戒律を持しつゝ、佛・菩薩を禮拜し、大乘經典をも讀誦する人たち(Cf. Charles Eliot: Hinduism and Buddhism, Vol. II, p. 103) が止住してゐたのである。なおブダガヤーを除くインドの他の三ヶ處——Kalinga, Bharukaccha, Surasira——も、セイロンとのあいだに交通貿易その他で、それぞれ密接な關係のあつたところである(その考證は省略する)。またセイロンの佛教とも交流があつたとみられる Andhra の大衆部に屬する東山住部や西山住部がブラーグリットによる大乘般若經をつたえていたことは、

Avalokītavratā の Prañāpradīpa-ṭīkā の記述(影印版西藏大藏經 No. 5229, 290, 4-1)によつても知られるが、大乘上座部はそのような大衆部系諸派のありかたと同様なありかたで、上座部でありながら大乘の影響をうけつつ存在したものとかんがえられる。

### 三

しからばその當時、セイロンのアヌラーダプラにおいて行なわれていた佛教はいかなるものであつたかというに、上座部の傳統を相承する Mahāvihāravāsīn (大伽藍住部)の傳教と、その派にむかえられなかつた Abhayagirivihāravāsīn (無畏山住部)の佛教とであつた。この中、後者のアバヤギリ寺が創建されたのは、前一世紀の後半 Vattagāmaṇi Abhaya の治世(43—17BC)であり、その寺院も初めころはマハーヴィハラ派に屬してゐたが、まもなく分離獨立してアバヤギリヴィハラ派をたてた(そのかんの事情については早島鏡正「アバヤギリ寺の興亡史」『東方學』第二十一輯、昭和三年三月を参照)。このアバヤギリヴィハラ派ができた當初は、若干の戒律上の解釋の相違を除いては、その教義の上に相違などはなかつたといわれている。しかるにワッタガーマニー王の特別の外護をうけて、その繁榮の基礎ができたこと、インドの Vajjiputtaka (犢子部)に屬する長老 Dhamma-

πci. の門弟たちが來島したとき、かれらがアバヤギリ寺にむかえられたこと、そしてその時からダンマルチ派の勢力がその派の中に扶植されるようになったことなどから、しだいにアバヤギリヴィハハラ派が勢力を増大し、寛大で自由なその派の特色が表面にあらわれ、かれらはインドおよびセイロンの正統派をなの人たちから異端視されるようになってたといわれる (Nikāyasamgraha, p. 11)。とくに Voharika Tissa の治世 (269—291 AD) に、インドから Vetullavāda (方廣説) の徒が來島し、かれらがアバヤギリ寺にむかえいられたことは注目すべき事件であろう。マハーヴィハハラ派があくまで Vibhajjavāda (分別説) の立場を堅持したのに對して、アバヤギリヴィハハラ派はかようにインドにおける各派と交渉をもちつつ、その學説の上でも寛容な態度をとるといふゆきかたが、上述の Vetullavāda のとき大乘派のものをもこぼさないという自由な包容的な態度を示すにいたつたのである。上座部佛教と大乘佛教とを兼ね學ぶとするされているのは、以上のようなこの派の性格を示すものと解される。

#### 四

Mahāvamsa の第三六章には、かの Vetullavāda = Vetulavāda が、正統派の長老や、正統派の教義を信奉する國王から排斥せられ、アバヤギリ寺に住む Vetulyaka がインド

に追放された事件がしるされている。それではこのように異端視された Vetullavāda とはいかなる説であつたかというに、Buddhaghosa の Kathavatthu-aññakathā には、「大空宗と名づけられる方廣部」 Mahāsūnatavāda samkhāta-vetulyaka とのべられていて、大空宗もしくは大空派の説を方廣部もしくは方廣派の説と同じものとみている。そもそも大空とは、十八空論には「大空謂身所栖託。卽器世界。十方無邊。皆悉是空。故名大空。」(大正三一、八六一中)とあり、中邊分別論にも「大空者。世器遍滿故說名大。此空說大空。」(大正三一、四五二下)とあり、その大空という語でよばれたこの派が大乗の空思想を特別に強調する派であつたことはうたがいをいれない(安井廣濟『中觀思想の研究』四二頁參照)。そしてその大空派が方廣派ともよばれたことは、方廣 Vajriyā と名づけられる大乘經典、なかんづく般若經を所依とした一派であつたに相違ない。玄奘譯「大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記」(大正四九、一四上)に、佛滅八百年中、セイロンの王 Mahasena の都城(アヌラーダプラ)に住した Nandinītra が大乘素咀纜藏を受持し、その中には般若經法華經その他の諸大乘經がふくまれていたとのべているが、あるいはこのナンディミトラのような人が方廣派の人であつたのであろうか。

ところで、大智度論卷一にはつぎのごとき注目すべき所説がある。「更有佛法中方廣道人言。一切法不生不滅。空無所

有。譬如兎角龜毛常無。如是等一切論議師輩。自守其法不受餘法。此是實餘妄語。」(大正二五、六一上)。ラモート教授はこの方廣道人を *les adeptes du Faug kounng* (*Vaiṇyaka*) とフランス譯しているが、それは般若學系の一群の人を指したことは明白である。智度論のその箇處では、外道の出家人法についてのべ、つぎに犢子部の比丘の言、説一切有(部)の道人の輩の言、方廣の道人の言というように、諸派の説をならべあげているのである。そこで嘉祥の三論玄義をみると、「二諦を迷失するものに凡そ三人がある。一に毘曇は定性の有に執らはれ(その)假有に迷つている。故に世諦を失ふ。(そればかりでなく)亦假有は宛然有るところ无しと知らない(ために)、復一の眞空をも失ふのである。二に大乘を學ぶ者で方廣の道人と名づけるは、邪空に執らはれて、假有を知らない。故に世諦を失ふ。既に邪空に執らはれて正空に迷ふから、亦眞(諦)をも喪ふのである。三には即世に行はれてある所(の説)で、具に二諦を知つてはゐるが、或(もの)はこれを一體と言ひ、或(もの)は二體だと言つてゐる。(かくて)二を立て、も(眞にそれが)成(立)しないから、復眞俗を喪ふのである。」(全倉圓照譯註岩波文庫本七九―八一頁)とのべてあり、方廣の道人と名づけられる人たちがおよそいかなる批判をうけていた人たちであつたかということが知られる。さきの *Vetulyaka* と云うのは、おそろくこのような人たちを指し

大乘上座部について(佐々木)

ているのであろう。他方、さきに一言した論事の註をみると、方廣部の説というのがつぎのごとくあげられてゐる。「(1)佛世尊は人界に住したりとは言われず、(2)僧伽は施を受くとは言われず、(3)僧伽は施を淨化すとは言われず、(4)僧伽は受用し飲み齧み味ふとは言われず(5)僧伽に施して大果ありと言われず、(6)佛に施すも大果ありと言われず、(7)一意趣者は性交すべし、(8)世尊に依つて法は説かれず。」(佐藤蜜雄・佐藤良智譯註「論事附覺音註」五七〇頁)。これをみても、かれらが邪空に執らわれて假有を知らない。故に世諦を失なうと難ぜられたであろうことが知られる。したがつて、セイロン上座部の傳統派なるマハーヴィハーラ派の人たちから、かれらが異端視されたことも充分にうなずけるのである。すなわち *Vetullavāda* は *Dīpavamsa* (xxii, 43~44) のうごとく *Vitandavāda* (似而非理説) としてうけとられていたのであり、かれらの持っていた *Vetulla-piṭka* は *abuddhāvaccanāṃ* としてしりぞけられたのであつた。

なお、ヴェートリヤカと稱せられた人たちのなかには、いろいろな異分子がまじつていたことが知られるのであり、また方廣派が大乘上座部の中で占めていた勢力上の比重についてもさらに検討を要するものがあるが、インド佛教展開の面において、大乘上座部という獨特の一つのありかたを示す派が存在した事實は、注目にあたいるものがある。